

コメントと総合討論

■ コメント

河合英次（河合塾公民科講師）：

河合塾で、公民、倫理政治経済という教科を担当しております、河合と申します。予備校の講師ということで、アカデミーの世界からは、このなかでたぶん一番離れている人間だと思います。まず僕のほうからは、今日、報告を拝聴させてもらって、気になった点、もっと聞いてみたかった点を、全員の方の報告に対してではないのですが、申し上げさせていただきたいと思います。そのあとに、今回の全体の報告のテーマについても少しお話をさせてほしいと思います。

まず、個々の報告についてですが、最初の平野さんの報告について、新首長となったYさんが43歳で年を取り過ぎているということですが、僕はその43歳なので、ちょっとショックを受けました。報告の内容を聞いていて、最初少し戸惑ったのは、後に質問でも挙がっていましたが、首長と王というのが一緒になって説明されていたことです。行政区長の役職名であるはずの首長が王というのは、ちょっと最初は混乱したわけですが、後ほどの質問に対するお答えの点で、その点は理解できました。逆に言うと、日本にはない役職名を日本語で説明することがやっぱり難しいんだということが、そのときわかりました。さらにもうちょっと聞いてみたいと思ったのは、当たり前なことなのかもしれませんが、バミレケというのは一体どういう人たちのことを言うのかな、ということです。つまり、彼らは先ほどの報告では、商業に従事する人たちが多く、だから、カメルーンのユダヤ人と呼ばれているという話をされていたと思うんですが、今のその話からすると、ひょっとすると、バミレケという人たちはもともとカメルーンには住んでなくて、外からやって来て、そこに住んでいることから、カメルーンのユダヤ人だというふうに表示をされたのかなと推論して聞いてました。もし、そのバミレケが外からやって来て商業に従事したとするのであれば、それは面白い話だなと思って聞いていました。というのも、外からやって来た人たちは、土着の人とは違うので、農業などはやりにくいと思うんです。つまり、土地を持たないわけですから、なかなか農業はやりにくいはずで、そうすると商業に傾いていく。普段

予備校で経済を教えていると、土着の人たちは、自分の土地では商業をやりにくいんじゃないかなと、思うときがあります。なぜかと言うと、土着の人たちが商業をして、その土地でもうけるということは、仲間を搾取することにつながりかねない。その点、外からやって来た人たちは、変なしがらみみたいなものがないので、商業に従事しやすい。逆に言うと、そのようにして外からやって来た人たちが自分たちからどんどんどんどんお金を取るの、土着の人たちから嫌われかねないのではないかと考えていました。これは完全に僕の推論かもしれませんが、バミレケがどんな人たちなのか、もう1回教えてほしいなと思いました。

それから、2人目の西さんのご報告です。大変面白い報告でした。2004年のスマトラ沖の地震をテーマに挙げて発表されておられたのですが、なぜ2004年なのかというのが、素人ながら、ちょっと疑問に思いました。というのも、おそらく、2000年代に入ってから、かなりの回数、スマトラでは地震があつて、僕も数年前、一度インドネシアに行ったのですが、そのときにも地震がありました。その地震に僕はかなり驚いたわけですが、現地の人から言わせると、あんなの大したことないよというようなことをおっしゃっていて、その直後、2012年あたりにまた結構大きな地震が確かインドネシアでありました。ですから、なぜ2004年なのかという質問よりは、そのときの対処、対策が、後の災害にどのように教訓として生かされていたのか、そのようなことをもう少し聞いてみたかったというのが1点目。

それからもう1点、実はこちらのほうが僕は興味があったのですが、2004年のスマトラ島の地震と、2011年の東日本大震災との比較ですね。その際の、人々の対応であるとか、社会とか宗教のあり方の違いによって、さまざまな相違点とか、そういうのが見えてこないのかなと。たとえば、スマトラの地震で、17万3000人の人たちが亡くなったといったときに、その17万3000人、おそらくこの前の東北の地震と同じで、当然遺体のすべてが見つかったわけではなく、多くの遺体はどこにあるのかもわからないという状態になったかと思います。推測ですが、日本であれば自然神崇拜、アニミズムみたいなものがまだちょっと生きてい

るところがあって、仮に遺体がなくても、海に向かって祈るとか、大地に向かって祈るとかということが、比較的受け入れられやすい文化を持っているのではないかと思います。その点ムスリムたちは、そういった考え方はあるのでしょうか。そもそも一神教アッラーを信仰する彼らが、自然に対して祈れるのでしょうか。また祈ったとしても、それはまた別の祈り方があるのかなと、もっと聞いてみたいと思いました。

それから、3番目、星川さんの報告については、かなり共感するところがありました。普段経済などを教えているものですから、タイでも、経済成長のスピードに、公害や災害の対策が追いついていないということが、今回のあの洪水を引き起こしているのかなと。それはかつて日本が高度経済成長のときに生活関連社会資本にばかり力を入れて四大公害病を引き起こしてしまったことに、すごく似ているような気がしました。今回のタイの洪水で、日本の企業の現地工場がかなり被害を受けたかと思いますが、そういう点で言うと、日本も人ごとではないので、タイにさまざまな技術援助が必要かと思って報告を聞いていました。

以上が、僕が報告すべてを聞かせてもらって、いくつか気になった点です。最後に1点、全体のテーマについて、僕の感想を言わせてください。今日のテーマであるジャスティスというのは、正当性であるとか、簡単に言うと、正義ですね。正義に関するお話では、今日、途中で星川さんが面白いことをおっしゃっていて、「相対化してごちゃ混ぜにはいけない、ごちゃ混ぜにするな」といったような発言があったかと思います。僕もそれにすごく共感を持ちました。今日の報告は、違うことを認め合うとか、違うことを超えて1つに

なるという、相対化できるような正義の話が多かったようにお見受けしましたが、相対化できない正義はないのかということが、少し気になりました。たとえば、王さんの報告のなかに、食の話が出ていて、ラマダンのあとにイスラームであるとか、インド人であるとか、一緒に夕食を食べているという報告がありました。宗教の境界が相対化されているお話としては非常に面白かった。たとえば韓国人が犬を食べるといったときに、おそらくここにいらしている知性を持っておられる皆さんであれば、文化が違うということで、ある程度は納得や理解はできる。では、犬を食べることは納得できたとして、世界のなかには人を食べる文化、食人種族というか、そのような考え方がありますが、そこまで相対化して認められるかということ、そこは正直、ちょっと違うんじゃないかなと、僕が限界を乗り越えることができないだけかもしれませんが、思ってしまう。つまり、相対化できない何かがあるのかないのか。その部分の議論をもっと聞いてみたかったなというのが、今日の報告の感想でした。奇しくも、つい最近日本は国際司法裁判所というところにオーストラリアから訴えられていて、調査捕鯨について、結局敗訴しました。負けました。国際司法裁判所はなにも、日本がクジラを食べる文化を否定したわけではないのですが、調査捕鯨が駄目だと言っただけなのなのですが、でも、根底にあるのは、やはりクジラを食べるというその行為が、西洋の諸国から言わせると、受け入れられないということだったと思うんです。つまり、この世には、なにか相対化できない正義というか、絶対的な正義があるのかないのか、ということが一番知りたかったですし、そこを皆さんの報告から僕も考えてみたいと思います。



ました。

幡谷則子（上智大学、都市社会学）：

最初に今河合先生が最後におっしゃった全体のテーマに関するご指摘を受けまして、正義という言葉についてコメントをしたいと思います。最初に趣旨説明のお話がありました。また、このご案内の趣旨説明を拝見したときにも、ちょっと私、違和感を覚えたんです。実際そんなに多様な正義ってあるのだろうか。そのところをまず疑問に思いました。正義には、やはり普遍的な正義というのがあるのではないかと。ですから、「広義の正義」、それから「狭義の正義」というものが一体あるのだろうかという疑問を持ちました。趣旨説明を読んで、これはたとえば、聖戦だとかジハードだとか、一種の正義のためには正当化される戦争がある、という意味でのコンフリクトの話なのかなと思って聞いたのですが、そこがまず、疑問だというのが1つです。

次に、5つの報告を聞かせていただいて、地域研究者として、どの地域も私にとってはなじみのない地域でしたので、それこそローカルな部分も含めて、民族性や文化に関する非常に豊かなご報告を聞かせていただきました。今日は非常に充実した内容のご報告を伺うことができ、ありがたかったと思います。そのなかで、今日の共通テーマが議論されていたと思うのですが、本当に正義を議論していたのかというと、実は正義というよりも、レジティマシーであるとか、ジャスティフィケーションつまり正当化という意味で議論をされていたのではないかなと思う節がありました。それが良いとか悪いとかいう問題ではなくて、正義について議論するときに、今日の共通課題として議論された 이슈が必ずしも普遍的な正義に向けたのではなく、いろいろな価値観がぶつかり合うときにどうやって正当化するかというところで、文化的な共生社会とか、調和の取れた、あるいは、和解のある社会を構築するために人々がどういったローカルな知恵を絞っているか、という話であったのではないかと思います。

ここからは個別の感想とコメントです。まず、最初の平野さんのお話、これはまさに正当性のお話だったと思います。非常に興味深かったのは、一般的には都市が成長していく一方で、農村が衰退していく。その際、慣習だとかリネッジを絶やさないことが社会のバランスを保つ術だ、というような実践が一部されていて、もちろん経済的には都市が豊かになっていくわけですが、農村の

ネッジを絶やさないことで都市と農村の共存を担保する知恵がある、というようなお話だったと思います。それは非常にローカルなレジッジとして素晴らしい実践だったと思うのですが、今後、この社会が市場経済化やグローバル化が進み、市場経済のほうが強くなってきたときに、このあり方がいつまでサステナブルなのだろうか。そういった議論はないのかどうかを、平野さんには伺ってみたいと思いました。

次に西さんのご報告に関してお話しします。今日の正義あるいは正当というキーワードから申し上げますと、西さんは結局、被災者たちの微笑みにある真実は何なのかという深い質問を投げかけられたのだらうと感じました。そのなかに、極限の状態にあったローカル社会によそ者が入ったときに、どういった物差しを持って入るかというお話がありました。その入って来た人々の物差しよりも、ローカル社会のほう、物差しとして逸脱した部分があり、それが反応としてあらわれたのではというお話がありましたが、私は、それはちょっと違うのではないかなと思うのです。やはり往々にして、支援だとか研究者が入って持ち込むときの物差しが、実は逸脱しているというふうにつまえるほうが、私は自然かなという感じを持ちました。逆にそういったことは、西さんを含めておそらくみんな経験しているのでは、簡単に解釈はできない。なぜ微笑んでいるかという解釈については、その行動に対するいろんな批判があったときに探されたけれども、そう簡単には解釈できないので、そこを研究者はきっちり押さえなくてはいけないし、それが地域研究者の使命だというようなことおっしゃったと思うのですが、まさにその通りだと思います。これはすごく時間をかけて理解することなのでしょう。加えて、私は社会心理学とか、災害状態の渦中にある人の心理については専門ではないので、簡単には申し上げませんが、極限の



状況にいたら、やはり微笑むことがヒーリングか自己防衛になっているのかもしれないと思うのです。これは個人的な感想です。あともう1つ、西さんへの質問です。ご報告のなかに、被災を契機に内戦状態が解消されたというようなご指摘がありました。これについて私は非常に疑問に思います。私はアジアのことに詳しくないので、実際今どんな動きがあるのか伺いたいと思いました。

次に、王さんのお話ですが、ご発表の最初の時点では、ハラールだったら肉を食べてはいけないのに、肉のメニューが入っている、というお話かと思って聞いていました。つまり、これこそ正当性の話なのかと思っていましたが、最終的には王さんのお話が一番普遍的な正義を議論されたのかな、と腑に落ちた気がします。要するに、ある一定の基準からすれば非正当のものがあっても、結局はみんながこの状況で、弱い人も招いて、「共食」によって豊かな時間を過ごす。そこにたとえば、イスラームではないのに入ってしまったというしたたかな人もいた、というのがありますけれど、これは、多様な人たちが集まった共生社会を目指す、あるいは、正義の実現の1つの方法かなというように伺いました。

それから、4番目の星川さんのお話ですが、これは災害に対して科学的な情報を扱うことや、研究者の立場から情報をコントロールすることは、権力の行使になりかねず、そこに正義の問題が入っている、というように伺いました。ですから、星川先生のご報告のメッセージは、テーマが災害ということもあり、生命であるとか、尊厳ある人間の生活がかかっているわけですから、研究者や科学者ごとにいろんな正義があるわけではなくて、普遍的な正義を目指すために情報コントロールしてはいけないし、そこに科学者の責任があるというように考えられると思います。ただし、もちろん解決策に限界はあると思います。あともう1つ付け加えたいのが、実際に科学者が英知を出し合って解決法を出したとしても、実践の場では、ロジスティックの制約だとか、行政の判断を尊重しなければならないという場面に遭遇するため、いろんなコンフリクトが生じるのですが、そのときに、制度外で行動することができるのだろうか、ということが正義を追求するときに求められるのではないかと思います。

最後の帯谷先生のお話は、女性解放という意味での正義を問題にされたと思います。それと合わせて、選択の自由つまりは正義の問題ですが、それを追求するなかで、結局は現実的には近代化

とか、政治的な判断とか、正当性の問題と関わってくるという意味で、両方の問題を議論されたのだと受け止めました。

門司和彦（長崎大学、公衆衛生学）：

正義について、私自身、わからないことが沢山あります。今日は、グローバリゼーションの下で、地域研究の領域としての正義の研究を本当にやったほうが良いのか、そうだとすればどのようにやるのか、やっているのかを考えられたら良いと思いました。今、グローバリゼーションの負の影響が、健康の領域でも出ています。グローバリゼーションが進むと世界が良くなるかと思ったら、基本的に貧富の差は開いていきますし、健康状態もまだ非常に悪い状況です。それに加え、国家間の軋轢、正義の衝突がグローバリゼーションによって起っていると考えています。私がやっていることに関しても、健康、ヘルシズム自身がほんとに正義から出て来たものかも微妙です。熱帯医学はもともと植民地医療から出て来たものですし、個人的に私は日本民族衛生学会の活性化ワーキンググループでやっていますが、これももともとはレイシャル・ハイジーン (racial hygiene) といひまして、優生学から出て来たものです。ほかにも、地球環境学がほんとに正義なのか、地域研究の正義って何だろうかということ、今回のコメンテーターを引き受けてから考えてきました。

今日の感想ですが、もっと正義の衝突とか葛藤の話が中心かと思ったら、そうではありませんでした。それぞれのケース、実践の非常に深い観察、報告があって、大変面白かったと思います。ただ、それらのお話はなにも正義と言わなくても、それぞれ面白かったのではないかと思います。この種の地道な研究が、地域研究の基本であって、学問の厚みを意味するものです。そして正義の対立が起きたときに、根本的な理解の基礎になり得るものだと思います。だから、あまり流行に迎合しないで、こういうことをしっかりやることは真実な方法だと思います。これやって何になるんですかという質問がしばしばありますが、質問自体がナンセンスだから、ほったらかしといて良いのだと思います。

一方で、地域研究って、ずっとこういうことで良いのでしょうか、という問いもあります。要するに、1つ1つの地域研究は面白いけれども、それをどうやって積み重ねていくのか。そういう個別研究を非常に尊重すると、本質的な批判を相互でしなくなって、積み重ねているようで、実は積

み重ねがない世界に終わるのではないかという疑問が生じます。それで、グローバリゼーションに勝てるのかどうか分からない。ここでは、結局グローバリゼーションは、地域研究に正義の研究を求めるようになったのか。それだけ価値の対立が起っているのかを、皆さんにお聞きしたいと思いました。

次に、リスクに関して、やはり正当な評価をする必要がありますが、少ないリスクを扇動するバイアスと、実際にあるリスクを少なく言うバイアスがあります。これは非常に政治的だし、経済とか企業利益が関わっているので、現場にいる人間が本当にばらしてしまうと、立場が危なくなるような厳しい状況があります。そういったバイアスがかかるなかで、科学者が何をやっていくかということを考えていかなければならない。しかも将来のことなので、不確実性を回避できないため、正しい判断でも結果的に間違っているということが起こりうる難しい問題だと思っています。

まとめにならないまとめですが、あまりそれぞれの正義を主張しないほうが良いのではないかと、そのためにこそ正義を研究する必要があるのだと思いました。最後にあまり正義を言わないことを考える上で、「過ぎたるは及ばざるがごとし」ではなく、「及ばざるは過ぎたるよりまされり」という家康公遺訓を引いて終わりにしたいと思います。これからこうしたことを議論ができれば良いと思います。ありがとうございました。

■ リプライ

平野美佐（京都大学大学院、アジア・アフリカ地域研究研究科）：

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。手短かに、個別の質問だけお答えします。まず、河合先生の、バミレケの人たちが外からやって来たのかという質問ですが、彼らは国外から来たわけではないのですが、バミレケ・ランドからあちこち、カメルーン全国に移住しています。そういう意味ではおっしゃるように、都市ではバミレケの人びとは「よそ者」です。「商人のジレンマ」というのがありますが、商人は自分のコミュニティでは自由に商売ができない、儲けようと思うとコミュニティから嫌われる、というのがあります。そういう意味で、バミレケの人びとが本当の意味で商才を発揮できたのは、しがらみのない都市へ移住してからだと言えます。ですから、彼らは都市に空間移動するだけではなくて、農民

から商人へという社会移動をしました。そして、不動産などをどんどん地元の人たちから買い上げたりして嫌われるわけです。おっしゃるように、バミレケの人たちは、よそ者として嫌われつつ、しかしそれがあつた種のメリットとなつて、商売を進めてきたともいえるのです。

幡谷先生のご質問で、市場経済化してグローバル化がすすむなかで、バミレケの首長制社会がずっと維持されていくのかという問題ですが、私も同じような関心をもつております。ただ、今後数十年の間になくなるとは考えられません。たとえば、バミレケはたくさん成功者が出ていますと申しあげましたが、彼らが村を重要だと思っている限りは、続くと思われまふ。昔は代替わりの行事なども含め、バミレケ社会では葬式や儀礼など、今ほど派手には行われていなかったといわれています。都市に移住する人たちが増え、経済力が増すほど、かつてなく派手になってきているのです。そういう意味では、今のバミレケ首長制社会は、これまでになく活気づいているといえます。ただ、それがかつてのものと同じではなくなっていることは確かです。また、都市移住民の子供、2世、3世、4世など都市で生まれ育つた若者たちにとって、故郷が遠い存在になりつつあるのも確かです。都市での同郷者の集まりに、いかに若者を引き寄せるのかは大きな課題です。再生産がうまくいかないと、やはりいつかは危機を迎えるのかもしれない。

西芳実（地域研）：

たくさん質問をいただいたので、できるだけ手短にお答えします。まず、河合先生からのお話で、2004年以降、インドネシアの災害対応にどんな変化があつたのかというご質問ですが、災害対策基本法などの制度化が進められたということに加え、災害ボランティアに関する認識が非常に高ま



りました。災害が起こると被災地支援のために、被災した地域の外からいろんな地域の人たちが現地入りする。支援活動の中には、遺体の回収のような極めて精神的負担の大きいものも含まれていました。他地域からの災害ボランティアは、初期の救援活動に対して有効でした。しかも、ボランティアといってもそれに関わってお金動く、被災地支援活動は専門的職業としても成立するという認識も共有されるなかで、2004年はインドネシアにおけるボランティア元年となったと言われていました。その後もインドネシアでは2006年中部ジャワ地震、2007年ベンクル地震、2009年西スマトラ地震というように、大きな災害が相次ぎました。そこから、インドネシアでは災害はいつでもどこでも起こりうるという認識が共有されました。その結果、たとえ災害の予知が難しかったとしても、事前に津波警報の知識の共有や、災害に対する心構えなどを深められるし、万一災害が起ってしまったときには、外から支援してもらえよう環境を普段から作っておくことで対応しようという考えが広まりました。特に、外からの助け、外助が大事だという考え方が広く共有されるようになったことは、非常に大きいと思います

次に、2011年の東日本大震災との比較について、身元不明の遺体や、遺体もない行方不明者をどのように弔うのかという質問についてお話しします。アチェでは通常、イスラム教のやり方に従って弔うんですけども、今回の災害では、イスラム教の通常の弔いの仕方ができませんでした。イスラム教では、24時間以内に遺体を埋葬して墓碑を建てますが、それがまったくできなかつた。そのため新しい弔いのかたちというのが作られました。それが墓碑をつくらない集団埋葬地です。1ヵ所に5000体とか10000体の遺体が埋葬されていますが、墓碑はない。そういった集団埋葬地があちこちに作られました。遺族としては、自分の身内、家族たちがどこに埋まっているかわからないわけです。だけれども、逆に言うと、どこかには埋まっていると思える。墓碑がないことによって、よりいっそう、そう思うことができるわけです。お母さんやお父さん、子どもたちはこの辺りに埋葬されているのかななどと思いつつ、どこかしの集団埋葬地に行って、津波1周年、2周年といった折々のときに、祈りを捧げるという形ができあがった。このような弔いの方法は、アチェでは非常に新しいかたちなんですけれども、津波被災という、たくさんの身元不明遺体が出た状態に対応して新たに考案されたものと理解できます。

幡谷先生からのご質問ですが、私自身も、紛争が解決したとか、社会の亀裂がなくなったという主張をしたつもりは全くありません。2つの軍事勢力に分かれて、武力行使が前提になったかたちでの戦争状態が解消したのであって、その社会の亀裂自体は、こんなことで簡単に解消するものではないというのは、もちろんその通りだと思います。ただし、ここで重要なことは、災害を契機に、政治的立場を問わずに、人道上の支援を互いに行うことができるということの人々が学んだことです。今も社会的亀裂はありますし、津波の被害を直接受けなかつたために、支援がをもらなかつた地域では、むしろ開発が遅れたというようなこともあって、地域内の格差が開いてしまった場所もあるんです。そういった課題に対して、アチェの人たちは今、自分たちの手でどのように解消するのか、といったことに取り組んでいます。ある意味で、復興はまだ全然終わっていないわけです。

もう一つ、外からの物差しについてですが、極限状態にある地域、特に被災地や紛争地に外から人が入って何かするというときに、外から来た人たちが自分の物差しを当然視してはいけないということは、ある種の常識だと思うんですが、ではどこの物差しにあわせればよいかと言ったときに、現地社会の文化がそのまま正しい基準であるということには必ずしもならないわけです。特にアチェの場合は、アチェ社会自体が被災前から紛争状態にあつて、一体何が現地の文化かということさえも一つに定められないような状況のなかで、皆さんそれぞれ支援をしている。だから、初期の段階で、何か行動を開始するにあたっては、何等かの物差しがなければ動けないので、みんなそれぞれの自分の物差しを持ってとにかく行動する。大切なのは、行動したあとの相手の反応をどうフィードバックできるかで、その力こそが問われていたように思います。地元の人の反応がうまく理解できないときに、文化の違いといった言葉で片付けて、それ以上理解することを諦めるのではなくて、いろんな情報を集めて、目の前にいる人々はこういうつもりなのかな、こんなこと考えているのかな、と推し量り続けようよ、という願いをもって、今日はお話させていただきました。

王柳蘭（白眉センター、地域研）：

私の関心のなかで正義を考えてみたいと思います。移民問題は、多文化主義、人権、国際関係、法学といったものが非常に密接に関係しています。日本でも、多文化共生という上からの政策などで、

移民をめぐる、当事者から政府までを含めて様々な角度から論じられました。私自身はそれに対して満足のいかない面がありました。私の事例でいえば、タイに住む中国系ムスリム、すなわち複数の文化を背負った人々は複数の暦で生活リズムを打っていますので、イスラーム的な暦の時間にそった文化—生態的なリズムのみならず、タイや中国的など、様々なリズムのなかで彼らは生きています。その複数のリズムが文化と結びつきながら体のなかで打っている。研究してはじめて気がつきましたが、これは非常に豊かなことです。特に興味深いことは、お互いのリズムが毎回毎回対立しているのではなく、特定のリズムのときに、そこに皆、同調していくのを見ることができるとのことです。私自身はムスリムではないので、イスラームという、過激とか、すごく狭い範囲での規律を言っているといった思い込みが研究前にはあったのですが、調査をはじめ彼らのリズムのなかに入っていくと、自分も彼らと一緒にご飯を食べたりすることで彼らのリズムに同調していく瞬間が、年に何回かありました。こうしたことに着目するだけでも、正義とか正義ではないとかという議論を越えたものが、見えてくるのではないかと考えています。

星川圭介（地域研）

まず河合先生の、日本から技術援助が必要ではないかという話ですが、日本からの技術援助というのは、実際もう入っています。今ある地方で進んでいる治水計画の大枠は、JICAと現地政府の各機関が関わって作ったもので、JICAが多くの技術的提言を行っています。

次に幡谷先生から、災害に対しての正義というのは、人々の幸福という観点から見て複数存在しえない、1つになるのではないかというコメントをいただきました。おっしゃるとおりで、私自身正義というキーワードをかぶせてしまったので、ややわかりにくい話になってしまったとは思っています。例えばバンコクを守るために、周囲の住民を犠牲にすることは許されるのかと言えば、それは明らかにNOであって、正義ではないわけです。とはいえ現実的には、それが「正義」としてタイ社会のなかでまかり通っていることも事実です。そんなある部分を犠牲にせざるを得ない状況が正義かどうかと言ったら、もちろんそうではない。バンコクの住民も外の住民も等しく水害から逃れて、衛生的な生活を送る権利がある。これが正義であると、私も思います。

今日申し上げたかったことは、そうした理想を巡る対立ではなく、現実問題として、バンコクに影響があるかどうかという科学的見解をめぐる対立があったということです。むしろ土嚢を壊した人々も、理念的な正義という完全な平等の実現までは求めておらず、もし土嚢を壊せばバンコクのなかに非常に大きな影響が及ぶと思っていれば、おそらく土嚢の破壊までには及ばなかったのではないかと、ということです。

幡谷知可（地域研）：

私は、正義というものが非常に声高に主張される国を研究対象としております。しかしいつも、そうした点がとても危ういような気がして、一步引きたくなる思いでフィールドに通っています。そのため、門司先生から、正義をあまり主張しないほうがいいのではないかというコメントがありましたけれども、その点は私も大変共感しております。

■ 総合討論

山本博之（司会、地域研）：

総合討論を始めるにあたって、議論の方向性をはっきりさせるために、3名のコメンテーターからいただいたコメントを私なりの関心から少し整理してみたいと思います。

やや乱雑な言い方になりますが、あえて大胆に翻訳してみると次のようになります。結局のところ、地域研究者は何でもかんでも相対化してしまう。違うものが出てくると、その間を取ってみて、何とか両方が納得するような方法はないですかと尋ねて、折り合いをつけさせて決着を付けさせようとしてばかりいる。でも、それでいいのか。世の中には絶対的な正義があるのではないのか。あれも正義これも正義と、言葉の上で正義だ正義だ

